

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	14
瑪瑙集	26
紅玉集	28
俳誌交歓	29
11月号月評	30
惠贈句集拝見(40)	32
惠贈俳誌拝見(11)	34
特別作品「赤道の獅子の都」	36
他誌転載	38
琥珀集作品鑑賞	39
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	40
Ⅱ	41
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	42
イタリア俳句・紀行文(3)	44
句集「火炎樹」によせて	46
嶽の国父の蒼天(32)	48
環本部句会報(5)	50

今月の一句

秋ふかき牛方宿にけもの部屋

桂樟蹊子

(昭和六十二年作)

九月の句会に塩の道の句が出ているのを見て懐かしく思った句である。牛方の泊まる部屋の下の土間に、牛の寝部屋がある。「そこは暗く、行く秋の冷え冷えとした気配があつたが、今もなお牛臭く、土臭く、汗臭いけもの部屋であつた」とある。重い塩の荷をつけてやっとの思いで親坂を越えたところの牛方宿には、今もなお汗と土にまみれた牛と人たちの苦勞の匂いが染み付いているという。いま一度訪れたいところである。

隆子

月祀る

塩路隆子

古戦址にあまたの兵火曼珠沙華
卑弥呼世の闇そのままに月祀る
糶焼く香流るる宮居巫女の舞
天平の螺髪仰げり野分過ぎ
色鳥の舞へる一閃宮舞台
秋篠の露けさに立ち幾礎石
秋灯に伎芸天女の指遊ぶ

十一月号光耀抄

塩路 隆子選

菱の実を食べたる記憶塩の味
龍の背に乗る風情かな月見舟
禅寺の一汁一菜水澄みて
麻裏の底の重たし今朝の露
ほろほろと零余子こぼるる雑木山
鯉の棲む生水川端に秋茄子
猿沢をめぐる月夜や采女祭
音読や「大きなかぶ」を爽やかに
鞍馬いま天狗なぞらへ青嵐
朝顔の路地に子の声煮ものの香
日翳れば湖の安息花真菰
ばかといふ夫のやさしさ今朝の秋
蝉時雨テント数多に古書の市
蝮酒男もすなる薄化粧
デッキより望む古代湖秋澄めり
古書市や樹下をちこちの蚊遺香
夕立にブリキの金魚残されて

笠井 清佑
石川 かおり
塩路 五郎
山口 キミコ
田下 宮子
坂上 香菜
小林 成子
鈴木 照子
伊東 和子
伊藤 純子
小澤 菜美
増田 一代
坂根 宏子
松岡 和子
松田 和子
五十嵐 勉
三川 美代子

賀茂育ち尻まるまると秋茄子
 記念樹に鯛の鳴くクラス会
 橋上に立つ雲水や柳散る
 初嵐砂紋一夜に変はりけり
 遠来の客をもてなす大花火
 よろづ屋に昔と出会ふ夜の秋
 きりぎりす声使ひきる籠の中
 揚花火地熱の残る草に座し
 ふんはりの影大いなる黒揚羽
 厄日過ぐ作柄の佳き近江米
 露座仏の背のまろやかに小鳥来る
 秋澄むや風を馳走の塩むすび
 琥珀色して銀杏が椀の底
 お月見の団子それぞれ子の個性
 坑道に涼しき風よ時流れ
 秋深し牛の寝そべる草千里
 デッキより湖を一望風涼し
 それぞれに吃水線や梨洗ふ
 病歴に加はる二項夏逝けり
 真夜中の大気充ちをり虫の声

宮崎左智子
 宮田 香
 福本すみ子
 藤見佳楠子
 中川すみ子
 中本 吉信
 大松 一枝
 中村ふく子
 能勢 栄子
 竹内 悦子
 田中 浅子
 辻 知代子
 常田 創
 土井くみ子
 中井登喜子
 山崎 里美
 西垣 順子
 吉田 希望
 栗倉 昌子
 谷口 俊郎

乳牛のまだ来てをらぬ露の牧
 夏バテの妻を氣遣ふ足運び
 からくりの忍者屋敷の大夕立
 秋蟬に古りし地蔵や塩の道
 乱れ萩のみの賑はひ山湯宿
 とりとめのない話など栗を剥く
 姿見の画竜点睛サングラス
 サングラス溶接工のやさしき瞳
 瑞々し長十郎を真つ二つ
 タイガースが好きで矍鑠生身魂
 くたびれた秋のコートが翻る
 夏空を仰ぎ泰然平和像
 描き上げし俳画を前に夜半の虫
 でかかどちま吉電車秋を行く
 かくなるはじつと我慢や秋財布
 鳥渡るスカイツリーを遠回り
 炎天に夫は農夫のボランテニア
 穂先だす葦の群生淀の岸
 座標軸持たぬ台風天まかせ
 ラムネ呑む昔の音をそのままに

和田森早苗
 中西理一郎
 長濱 順子
 片岡久美子
 北尾 章郎
 森下 康子
 阪本 哲弘
 杉本 綾
 高谷 栄一
 田中 芳夫
 紀川 和子
 桂 敦子
 川崎 利子
 木戸 宏子
 小林 久子
 井口 淳子
 池田加寿子
 伊藤 和子
 大島みよし
 岡 佳代子

舞扇のごとく咲きをり鶏頭花
 生命産む潮の干満月の技
 老いてなほラビアンローズ秋扇
 嫺やかにコスモス万のフラダンス
 誇らしく来歴語る秋刀魚の目
 網笠にひかり茫茫風の盆
 宇治花火源氏ロマンの絵巻物
 盆僧と孫のはなしをひと頻り
 コスモスを挿して客待つ人力車
 ついと岩はなれて遊ぶ糸とんぼ
 秋の季へバトンタッチやはうき雲
 新米のおにぎり香る口いっぱい
 山頂はお花畑よ山ガール
 教会に棕櫚の花咲く一とこころ
 腹七分の食欲の秋欲しがらず
 遠泳を自慢し合へり少年期
 道東の畑に高く麦ロール
 アトリエの影ゆれてをり待宵草
 朝顔の「浮世絵美人」色香かな

和田 郁子
 山崎 真義
 山本 丈夫
 前川 ユキ子
 村田 望
 藤本 秀機
 難波 篤直
 新実 貞子
 西田 史郎
 竹内喜代子
 辻 香秀
 寺田 光香
 笹井 康夫
 清水侑久子
 鷺見たえ子
 吉田 宏之
 渡部 法子
 西岡 裕子
 西村 敏子

琥珀集

月見舟

石川かおり

工場のラジオ体操あきつ飛ぶ

臨月の友堂々と桃を食む

龍の背に乗る風情かな月見舟
(大覚寺)

口笛の先に柴犬露葎

通販のカタログ繰れる夜長かな

ふかふかの赤座布団や敬老日

滝までの道を流せり秋出水

菱の実

笠井 清佑

子午線

塩路 五郎

人を恋ふ人ある佐保路秋の蝶

蕎麦の花右に左に風の筋

三山の一つ水面に布袋草 (飛鳥本薬師寺跡)

菱の実を食べたる記憶塩の味

山の辺の入目を撫でる花芒

憶良碑に秋の七草溢れ溢けり

陸奥の悲鳴届かず猛り鴟

父に無き八十年を生き晩夏

初秋や柀目のしるき男下駄

秋風に鳥獣戯画の大相撲

台風に地球の呼吸乱れをり

禅寺の一汁一菜水澄みて

故郷に子午線標いわし雲

金婚も疾うに過ぎけり栗の飯

涼新た

山口キミコ

子の書架

田下 宮子

雨戸繰る風の流れや涼新た

夏惜しみ閑空見むと「はるか号」

ツインビルの空中通路天高し

内閣の「どぢやう」の意志や秋はじめ

憂き事をしばし忘れむ花火の日

麻裏の底の重たし今朝の露

斎場にこだはる白や夾竹桃

秋茄子

坂上 香菜

采女祭

小林 成子

鯉の棲む生水川端に秋茄子

燭ゆらぐ弁財天や法師蟬

八方へ湖偵察の秋鶉かな

錆色の湖中鳥居や秋夕べ (白髪神社)

湖ひかる岸群生の曼珠沙華

伊吹嶺に雲の影なし秋澄めり

湖風になびく花蕎麦北近江

建築書さはに子の書架秋の朝

霧深き最果ての地の開拓史

ほろほろと零余子こぼるる雑木山

毒茸に注意の札や登山口

放牧の牛のカウベル島の秋

コスモスを寮母が活けし男子寮

花芙蓉ガラシヤは妻の鏡てふ

花扇の龍頭船や月いよよ

雲出し月へ拍手の鳴り止まず

猿沢をめぐる月夜や采女祭

東西の塔の呼び合ふ星月夜

聞き役となりて子の愚知長き夜

敬老日亡夫の眼鏡を洗ひけり

婚の子と写真撮影秋美しき

風とダンス

鈴木 照子

風船葛風とダンスの音幽か

音読や「大きなかぶ」を爽やかに

計算カードに捲り癖あり今朝の秋

風一陣「もう秋やね」とリュックの子

インターホン鳴らす夜更けの大飛蝗

超若きボーイフレンド捕虫網

糸瓜成るたわしとなれば出番あり

青 嵐

伊東 和子

稜線に湧く雲あまた街残暑

朝涼の門百円の挽ぎ胡瓜

新涼の手水を湛へ鞍馬石

ここよりは唾蟬世界写経堂

鞍馬いま天狗なぞらへ青嵐

一徹は亡父の人生秋高し

明智塚へ添へたきものに花桔梗

今井町の秋

伊藤 純子

ランドマークは榎の大樹雲は秋

秋日濃き材木商の駒繫ぎ

寺内町床屋に紺の牽牛花

寺秋暑普請の塵の舞ひ上がる

観音へ飛鳥川沿ひ虫の声

朝顔の路地に子の声煮ものの香

秋帽子クリームソーダーごとき空

花真菰

小澤 菜美

荒野行く山卓の灯りのくねりかな

日翳れば湖の安息花真菰

土産とて琉球珍珠黍風

泡盛に珍珠ちびちび居待月

野ぶだうの瑠璃の瓔珞水ほとり

人馴れの鶉「馬鹿つちよ」などと云ひ(馬鹿つちよ＝鶉)

吾が一部となれるマイ杖花野風

新豆腐

増田 一代

わが手つき障子を洗ふ母に似て

ばかといふ夫のやさしさ今朝の秋

野路歩き心地よく聞く法師蟬

八月の雨の夕べや下駄の音

新豆腐の小さき商ひされど美味

かなかなのよく鳴く日なり辻地蔵

静かなる風の訪れ秋に入る

藍浴衣

松岡 和子

白蒸しの加減上々魂迎へ

蝮酒男もすなる薄化粧

秋草を活けて野となる通し土間

ひと跨ぎほどのせせらぎ糸とんぼ

晩節は藍の浴衣で過ごしたし

後先になりて蜻蛉と峠越え

留守番の夫鬼灯を会得せる

赤蜻蛉

坂根 宏子

蟬時雨テント数多に古書の市

トンネルを抜れば青嶺細身なる(高見山にて六句)

夏草の伊勢街道に市の跡

頂上の小さき社や赤蜻蛉

蝸が季の移りを鳴き交はず

山百合が飾る車窓や吉野道

山麓のたこ焼き店に冷えトマト

ミシガンクルーズ

松田 和子

デッキより望む古代湖秋澄めり

さざ波の琵琶湖周遊秋高く

想ひ出の夏を彼方に滋賀の湖

還暦を祝ふ湖畔の風さやか

名月や還暦祝ふ宴灯り

異国かと思ふアルプス秋の声

新涼や日々成長の園通ひ

瑠璃集

石見銀山

中井登喜子

銀山に製鍊所跡とかけ這ふ
坑道に涼しき風よ時流れ
間歩^{まぶ}出れば坑夫迎ふる法師蟬
格子館夏帽の子をコマ送り（金子みすゞ記念館）
片蔭を歩けば出逢ふみすゞの詩

鬼灯

西垣 順子

湖岸にて輕鴨親子啄める
デッキより湖を一望風涼し
鬼灯を求め色付き待てる日々
五山いま火の競演や魂送り
九才の「剃刀の儀」や夏休み

草千里

山崎 里美

コスモスの揺れて阿蘇山揺らぎをり
そば味のソフトクリームまはし食ひ
秋深し牛の寝そべる草千里
「ぼってん」のことは飛び交ふ阿蘇の秋
カルデラに暮らす阿蘇人空高く

吃水線

吉田 希望

秋の朝白旗空を叩きけり
なんきんの四半分つつ売られけり
それぞれに吃水線や梨洗ふ
竜が玉吐き出したるやけふの月
本日は直行直帰雁渡る

流燈

粟倉 昌子

病歴に加はる二項夏逝けり
隣接の墓と分け合ひ花桔梗
広沢に浮かぶ流燈経を詠む
流燈の増えて風筋頭はなり
送り火や祖は冥界のどのあたり

立秋前後

熊蟬の気合入れ鳴く劫暑かな
夕立に生き返りたる我が呼吸
嫁ぐ娘が墓を洗ひぬ故里遠く
節電の屋内逃れ大文字
真夜中の大気充ちをり虫の声

谷口 俊郎

大夕立

からくりの忍者屋敷の大夕立
手裏剣を投げる眼差し炎天下
鮎の群つぶさに見ゆるこの浅瀬
大蟻蛸吾がもの顔に朝の浜
子を看視プールサイドの罽帽子

長濱 順子

秋の日々

ハモニカの音色の似合ふ秋来たる
ちちうし
乳牛のまだ来てをらぬ露の牧
セシウム―37稲穂の波の歎きかな
つんつんはもうやめようよ吾亦紅
敬老の日とて変らぬ厨事

和田森早苗

マスカット

雲の間に白馬雪溪夕茜
秋蟬に古りし地藏や塩の道
湧き水を掬ふ煌きマスカット
朝顔に雨足激し濃むらさき
風はらむ旅の衣や鬼貫忌

片岡久美子

遠花火

此処よりは志賀の里なり鯛雲
しばらくは猫と戯れ秋の蝶
夏バテの妻を気遣ふ足運び
追憶の刻流れけり遠花火
夏暖簾くぐる素敵な脚線美

中西理一郎

乱れ萩

先住を言はぬばかりに町の蛇
蛇の衣脱ぎ捨てありしごみ置場
佳き詩生れ色紙を買ひに生身魂
乱れ萩のみの賑はひ山湯宿
つつましき花葛侵すブルドーザー

北尾 章郎

十一月月号月評

塩路 隆子

菱の実を食べたる記憶塩の味

笠井 清佑

菱の実と言えば最近では忍者屋敷でその殻にお目にかかったくらいのものである。むかし忍者が自分の進んだ後に、左右に二個の角のある菱の実の殻を、敵をよせつけないために地面なり床に撒きながら、逃走したとされる。夏に池や沼の水面に白い四弁の花を咲かせる。秋に実を結ぶが、若いうちは生で食べるが、熟してからは熱を加えて食べる。作者は菱の実を食べた記憶があると言われる。しかも印象に残っているのは塩味だったというから、茹でるか蒸すかのものを口にされたのであろう。筆者にもほのかな記憶がよみがえる。白い実で栗、いや椎の実とよく似た味だったことを思い出す。遠いむかしの懐かしさの蘇る句である。「塩の味」の措辞が句を引き締めいい句に仕上がっている。

龍の背に乗る風情かな月見舟

石川かおり

京都の大覚寺に広がる広沢の池で詠まれた句である。

桜と月の名所であってお月見には龍頭船を浮かべるなど、平安のころの都人の優雅を偲ぶ行事として人々を集めている。作者も月見舟に乗られた。まるで「龍の背に乗った風情」であつたと言う。その雅びな立ち居振る舞いの風情を演出された中に身をおかれ、さぞかしご満足されたであろう作者の顔が浮かぶ。「龍に乗る風情」に言い尽くされている。いい体験をされたものである。

禅寺の一汁一菜水澄みて

塩路 五郎

塩路家は禅宗、道元禅師を開祖とした永平寺が本山の曹洞宗で戒律の厳しい宗派である。特に一般の人が訪れても食事の作法は厳しく、質素を旨とし一汁一菜ときめられている。この句は永平寺を訪れた時の作品であろう。多くを言わずその厳しさを表現し省略の効いたリズムのあるいい句に仕上がっている。特に「水澄みて」の季語に広がる禅寺の厳しさ穢れのない仏の世界をうまく表現、言い得た季語の働きを示した句である。

(以下略)